アリストテレースに於ける可能概念の諸相（承前）

安藤孝行

三

能力及び受動性を具體的現實的な個物に内在する一方的方向の潜在的傾向と解する原本的用語法は、此概念に對するアリストテレースの定義を形成し、此定義に卽する可能性考察の出發點をなしては居るが、彼の思索の發展方向は却て此原本的デュナミズムを喪失して、觀念的水平化の方向をとつたものの如くである。（一一九）この事は既に我々が上に於てデュナミス概念の對立契機の平等化の現象に於て看取した所であるが、斯かる水平化の生ずる動機の一つはデュナミス概念の中、第二義の受動的可能の概念の本質に存するものと思はれる。卽ち運動及び活動は可能より現實への發展として理解されるが、此際能動的可能は形相の原理であり、受動的可能は質料の原理であるとされる。（一二〇）勿論形相と云つても、それに適應した質料の上に實現される以前の形態として、動力因に内在する限り、それは能動的可能であり、他方質料と雖も、それが全く無記的ではなく、或特殊の形相群に對してのみ受動性を持つ限り、之亦形相の受動的可能である事は前述の如くである。然し乍ら能動的可能は比較的限定的であるのに對して受動的可能は比較的無規定である。能力は規定者であり、受動的可能は受動者であるから、若し形相の實現が兩者の結合によつて生ずべきな

らば、方向を決定するものは後者であるよりも寧ろ前者でなければならない。勿論之は比較的な問題にすぎぬ。後者は前者に比して無規定であり、よりひろき外延を有するにしても、尙一定の規定を含む以上、その限りに於て一方性を含む事は否定出來ない。然し視野をこの特殊の活動に限る限り、一方性は唯前者にのみ由來すると考へうる。例へば大理石は像一般の質料であるからそれは勿論靴になる可能性は持たない。大理石に於ては像になる方向は像にならぬ方向に對して優位を持ち、その意味で大理石は像たらんことを要求してゐると云へやう。(一二一) 然しそれは特にヘルメースの像になる事を要求してゐるのではない。大理石そのものに於てはヘルメースもアポローンも平等無差別である。だからヘルメースの像になる方向はヘルメースの像にならぬ方向に對しては優越性を持つが、ヘルメースの像になる方向はヘルメースの像にならぬ方向に對して特に優位を占めるとは言へない。然るに能力又は動力因に於てはヘルメースの像になる方向はヘルメースの像にならぬ方向に對して優位を占める。蓋し像の類的形相はこのヘルメース像と言ふ特殊的製作に於ては動力因にではなく質料因に存する。動力因はこの質料因に存する類的形相に對して、特にヘルメースのと云ふ種的限定を與へるのである。だからこの製作段階に於ては像であるかないかは最早問題となつて居るのではない。それは既に豫定されたことである。この類的限定の豫定の下に特殊的限定を與へるのが製作に他ならない。(一二二) 故に此特殊の製作段階に視野を限定する時には質料は兩方向的可能性を持ち、能力のみが一方的限定を與へると考へられる。そこで前者が形相、後者が質料として、兩者の結合によつて個物が製作されるのである。アリストテレースの思惟は茲に可能から現實へと言ふ一元的なデュナミズムから、形相と質料による個物の合成と云ふ論理的二元的要素觀へと移行する。形相は形相としては現實的であり、(一二三) 質料は形相としては可能に止まる。能力は形相の獨立態で

はないから、現實ではなくて可能であるにも拘らず、それが特殊的形相の限定を與へるものであるところから、デュナミスは之によりはむしろ質料の側に認められる。然るに質料は上述の如き意味に於て兩方向的である。隨てデュナミスも亦兩方向的であると考へられるに到るのである。

能動と受動の兩種のデュナミスの協同によつてエネルゲイアが生ずると言ふ發展の思想に於てはデュナミスは一方的でなければならなかつた。然るに可能と質料、形相と現實が同一視されて、質料に形相が與へられると言ふ事と可能が現實になると言ふ事が平行して考へられるに到れば、可能が兩方向的靜止的となるのは當然である。初めには運動の原理と考へられたデュナミスは茲に於て却て靜止的原理となり、運動の原理はエネルゲイアに移される。斯くの如き異種的な對概念の交錯によつてデュナミスの原本的な動性が失はれて、觀念的中和性に近づくのである。(一二四)

(一一九) Met. θ, 1, 1045, b, 34 ff.; θ, 6, 1048, a, 27.

(一二〇) De Gen. et Corr. A, 7, 324, b, 18; B, 9, 335, b, 30; Meteor. Δ, 10, 389, a, 30; Λ, 2, 339, a, 29; De Gen. An. A, 20, 729, a, 10; 21; 729, b, 20. &c.

(一二一) Phys. A, 9, 192, a, 20

(一二二) Met. Z, 7, 1032, a, 20: δυνατὸν γὰρ καὶ εἶναι καὶ μὴ εἶναι ἕκαστον αὐτῶν, τοῦτο δ' ἐστὶν ἡ ἐν ἑκάστῳ ὕλη. De Gen. et Corr. A, 7, 324, b, 6: τὴν μὴν γὰρ ὕλην λέγομεν ὁμοίως ὡς εἰπεῖν τὴν αὐτὴν εἶναι τῶν ἀντικειμένων ὁποτερουοῦν, ὥσπερ γένος δν; B, 9, 335, a, 32; De Cael. A, 12, 283, b, 4.

(一二三) De. An. B, 2, 414, a, 16: ἡ μὲν ὕλη δύναμις τὸ δὲ εἶδος ἐντελέχεια. De An. Γ, 2, 426, a, 2: εἰ δή ἐστιν ἡ κίνησις καὶ ἡ ποίησις καὶ τὸ πάθος ἐν τῷ ποιουμένῳ, ἀνάγκη καὶ τὸν ψυχρὸν καὶ τὴν ἀκοὴν τὴν κατ' ἐνέργειαν ἐν τῇ κατὰ δύναμιν εἶναι· ἡ

γὰρ τοῦ ποιητικοῦ καὶ κινητικοῦ ἐνδέχεσθαι ἐν τῷ πάσχοντι ἐγγίγνεσθαι. 茲では明かに能動者が現實的、受動者が可能的とされてゐる。De An. T, 5, 430, a, 18: οὐδὲ γὰρ τελειότερον τὸ ποιοῦν τοῦ πάσχοντος καὶ ἡ ἀρχὴ τῆς ὕλης. 茲では原理が質料に對置されてゐるが、この原理とは能動的可能に該當する。行爲に於ても δύναμις が ὄρεξις に對立せしめられる際には、それは單に受動的可能性の意味に解せられねばならない。Rhet. B, 19, 1392, b, 19: καὶ εἰ ἐδύνατο καὶ ἐβούλετο, πάσχοιμεν· πάντες γὰρ ὅταν δυνάμενοι βουλεύωσιν, πράττουσιν· ἐπιτροδοκεῖν γὰρ οὐδέν, ἐὰν εἰ ἐβούλετο καὶ ἡνδέχετο τῶν ἐκὸν ἀκούσιον, καὶ εἰ ἐδύνατο καὶ ἠρνεῖτο, καὶ εἰ ἐδύνατο καὶ ἐπεθύμει· ὡς γὰρ ἐπὶ τὸ πολύ, ἃν ὀρέγονται, καὶ ποιοῦσιν, κτλ. 前回三四頁以下參照。

（二四）Cf. Hartmann, Möglichkeit und Wirklichkeit, Einleitung § 3. Faust, Möglichkeitsgedanke. I. 97.

然し乍らデュナミスが特に受動的可能の側に認められるにしても、それが質料因に內在する質料性である限りは、その原本的な一方性は全く失はれはしない。何故ならばそれは質料因たる存在が現實的に存在する事を要件とするからである。質料因の持つ受動的可能性は前述の如く類的形相に關り、隨て動力因の持つ能動的可能性の種的形相に對しては兩方向的である。卽ちそれはこの類に包攝される對立的な種に對しては平等な可能性を有する。然し乍ら質料因が現實的な存在である限り、それは類的形相を現實的に有し、之に應ずる類的可能性は一方的である。例へばアポローンの銅像の質料因は現實的な銅として自ら銅の形相を現實態に於て持ち、この具體的な銅は又像の形相たば一方的な可能性として有する。それは如何にもアポローンの銅像と云ふ個物に對しては類的可能として兩方向的であらう。然し像そのものは銅に於て一方的な可能性である。銅は像になりうるのみならず又貨幣にもなりうるのであり、貨幣は像ならぬものであるから、銅に於ける像の可能性とても一方的とは言へないと言ふ反對も出でよう。然しもし斯くの如き主張が成立するとすれば動力因の持つ能動的種的可能性についても同樣にその一方向性が否定される筈であ

る。何故ならば彫刻家はアポローン像をもヘルメース像をも作りうるものだからである。銅が像にも貨幣にもなりうる事、彫刻家がアポローンをもヘルメースをも造りうる事は同一の存在が二つ以上の可能性を持つと言ふに止まつて、同一可能性が本質的に兩方向的であると言ふ事にはならない。又質料の持つ可能性は實現する事もあれば實現しない事もあらう。然し質料が存する限りそれは自體的には存在への原理であつて、非存在への原理ではない。銅は銅像になることもあり、ならぬ事もある。然し銅が銅像の質料であると云ふ事は、それが銅像の存在への原理たる事であつて、決してその非存在の原理たる事ではない。銅像は銅があるから存在するが、銅像が存在しないのは銅があるからではない。銅像が存在しない原因は銅そのものが存在しないことによるか、或は銅はあつてもそれを像に形成する工人がない爲であらう。銅像の非存在が銅そのものに歸せられるとすればその唯一可能な仕方は、質料たる銅がそれ自ら缺如する事によつて銅像の非存在の原理となるといふ事である。即ち質料は偶然的にのみ非存在の原理なのである。然るに自らが存在することによつて或他の存在者の存在の原理となり、存在せざることによつて非存在の因となる如き意味で存在と非存在の兩原理を自己の中に含むところのものは、現實的な存在ではなくて、一般概念である他はない。この一般概念が實在性をうる時に初めて具體的な質料が現れるのである。そしてこの一般概念の擔ふ可能性はデュナミスと區別されて ἐνδεχόμενον と呼ばれるものに他ならない。それは ἐνδέχεσθαι と言ふ動詞から生じた概念で、許容されるもの、認容されるものを意味する。之を論理的に定義すれば「それがあるとしても何等の不可能も生じない事である。」(一二五) 不可能は一種の必然であるから、それの否定は必然の否定である。(一二六) 然し單なる必然の否定は全く消極的であつて何等の動性を持たぬ。それが現實的にあるとしても何等の不可能も生じないとふ事は、それが現

實的にないとしても何等の不可能も生じない。(一二七) それはあつてもよければなくてもよいものである。だからそれのみからは未だ何等の運動や生成は生じえない。然しそれの否定は積極的に運動生成を否定するが、それの肯定は斯かる積極的否定性を除去して生成に自由の天地を與へる準備を果すものである。故に實在的動的なデュナミスの活動は之を豫想してのみ可能であるが、エンデコメノンそのものは斯る實在性を持つことなき單なる觀念的可能概念にすぎない。(一二八) エンデコメノンに屬するものはカントの例を借りれば百ターレルの貨幣の如きものである。百ターレルの貨幣はそれが存在するものとしても何等不可能な事例へば天地が動顛するといふ樣な事は起らないであらう。だからそれはエンデコメノンである。然し斯かるエンデコメノンから百ターレルの貨幣を現實的に獲得する事は出來ない。百ターレルの貨幣を獲得する能力は斯くの如き觀念的可能性ではなくして實在的なデュナミスである。斯かる能力は具體的な個人例へば何某と云ふ實業家に內在する財政的手腕である。哲學者某が頭の中で考へた百ターレルは存在と非存在が全く中和的均衡を保つてゐるが、實業家某の手腕としての百ターレルの可能性は決して有る事と有らぬ事が平等な存在形態なのではなくして斷然有る事の方に優位がおかれてゐる。だから彼が或企業に於て其質料をうれば彼の手腕の中に內在した百ターレルは現實的な貨幣として彼の手中に落ちるであらう。右は能動的可能についての例であるが、受動的可能としての質料とエンデコメノンの間にも程度こそ異れ同樣な存在性の相違がみとめられやう。

(一二五) An. Pr. A, 13. 32, a. 18: λέγω δ' ἐνδέχεσθαι καὶ τὸ ἐνδεχόμενον, οὗ μὴ ὄντος ἀναγκαῖον, τοῦδέ τινος δ' ὑπάρχειν, οὐδὲν ἔσται διὰ τοῦτ' ἀδύνατον. cf. Met. θ, 3, 1047, a, 24 ff.

(一二六) An. Pr. A, 13. 32, a, 25 ff. τὸ ἐνδέχεται ὑπάρχειν καὶ οὐκ ἀδύνατον ὑπάρχειν καὶ ἀνάγκη μὴ ὑπάρχειν, ἤτοι ταῦτα ἐστα

ἢ ἀκολουθοῦντα ἀλλήλοις. . . . ἔσται ἄρα τὸ ἐνδεχόμενον οὐκ ἀναγκαῖον καὶ τὸ μὴ ἀναγκαῖον ἐνδεχόμενον. συμβαίνει δὲ πάσας τὰς κατὰ τὸ ἐνδέχεσθαι πορτάσεις ἀντιστρέφειν ἀλλήλαις. οἷον τὸ ἐνδέχεσθαι ὑπάρχειν τῷ ἐνδέχεσθαι μὴ ὑπάρχειν, καὶ τὸ παντὶ ἐνδέχεσθαι τῷ ἐνδέχεσθαι μηδενὶ καὶ μὴ παντί, καὶ τὸ τινὶ τῷ μὴ τινί.

(一二七) An. Pr. A, 13, 32, a, 33 ff.

(一二八) Kant, Kritik der reinen Vernunft. 627 プラトーンの Politeia に於けるヒルの寓話の選擇可能も畢竟斯かる觀念的可能に過ぎない。そこには現實的な欲求の對抗緊張はみとめられない。Cf. Faust, op. cft. I. 51.

エンデコメノンが觀念的可能を意味する事、そしてデュナミスが時に之と同一視される事は、命題が實然（ὑπάρχειν）と必然（ἐξ ἀνάγκης ὑπάρχειν）と可能（ἐνδεχόμενον ὑπάρχειν）とに分たれ、(一二九) エンデコメノンが、命題の一形式を占める事によつても推測される。斯くの如きエンデコメノンが其外延に於て必然的なもの、必然的ならぬもの、可能的なもの（τὸ δυνατόν）を包括すると云ふ事實は、(一三〇) 更にこの概念の觀念性を顯はにするものである。何故ならば必然的なものは常に現實的であつて、(一三一) その限りに於てデュナミスを含まぬからである。アリストテレースは又存在を二つに分つて一は永遠的不變的であつて他樣たりえぬものと、他は一時的可變的であつて他樣たりうるものとする。(一三二) 前者は例へば神靈、宇宙、天體及び其運動、地、恒常的自然現象、(一三三) 最高原理、推論の必然的結論の如きものであり、(一三四) 之等の間には他樣たり得又は他樣たりえざる種々の程度上の相違が存する。一般に他樣たりえざるものとは目的論的一義的に決定されて居り、之に關る認識は理論的認識である。(一三五) 之に反して後者は斯る一義的決定性を持たず、時と場合によつて變化する事のあるものであり、自然現象の一部と人間行爲の領域を形成し、主として實踐的又は製作的認識の對象である。(一三六) 勿論他樣たりうるもの、必然的ならぬものとはそれの生成が無原因的偶然的なものを意味するので

はなく、唯その原因が目的論的見地からして可變的であり、或は概念的に不定的なのである。然し具體的個別的に言へば原因と結果との關係は必然的であり一義的に決定して居る。(一三七) 例へば旱魃と言ふ事は自然現象の中でも他樣たりうる現象に屬する。それは旱魃が何時でも必ずある事ではなくして時として起る異常的な現象だからである。それが他樣たりうると云ふのは、原因がない譯ではなく唯其原因が恒常的でないのみである。然しこの不定性は旱魃と言ふ特殊的現象を、單に一般的な時間と空間と言ふ樣な抽象的前件に關して考察する限りに於て認められる。我々が進でこの現象の前件を思惟の中に豐富にとり入れてゆけば、此現象は漸次必然的一義的決定性に近づいてゆくであらう。例へば前件を夏期と限定すれば、旱魃は單なる時一般に於けるよりは大きな蓋然性をもつた現象となる。更に之を雨多き地方と限定すれば、此蓋然性は一層增大して必然性に接近する。(一三八) 斯くの如くして無限に進めば、旱魃はかかる條件のもとには、常にある事となり必然的な事となる譯である。前件が完全に限定されれば後件は必然的となる。(一三九) 然るに前件が完全に限定されるのは唯個別的な場合に限られる。故にアリストテレースは個別的なものとしてみられた個別的なものは必然的であると述べてゐる。(一四〇) 唯個別を普遍の單なる一例としてみる時、卽ち前件を全く無限定に保つ時にのみ個別的現象は偶然的となり、斯くありうると共に他樣にもありうるところの存在となるのである。他樣でありうるとは或特定の原因が具體的な場合に他樣な結果を生ずると云ふ事ではない。斯くの如きは何ものも原因なしに生ずる事はないと云ふアリストテレースの考に反する。(一四一) 此命題の意味するところは或特定の點でのみ共通的な別樣の原因から、別樣の結果が生ずると云ふ事にすぎない。此共通的な點を抽象して構成せる類概念に就てみれば、(一四二) それは他樣な結果を生じうるものと云ひうるのである。例へば人間の行動は多樣であつて一樣ではない。或者は走り或者は笑ひ或

者は語る。又同一人の行動でも或時には斯く斯くであり他の様にはしかじかである。人間は誰でも常に走るとは限らない。だから人間一般の行動は他様たりうるものであり、個々人の行動も亦他様たりうるものである。然し或特定の個人が或特定の時に爲す行動は或は走る事であれ或は笑ふ事であれ、兎も角も其具體的環境と內的原因とによつて充全的に規定された必然的結果であつて、決して他様たりうるものではない。エンデコメノンと言ふ意味での可能性は、抽象的に考へられた主體にとつて矛盾なく結付きうる事態の全範圍に妥當する。卽ち人間が時と場合によつて爲す事のある事柄は人間にとつてエンデコメノンである。だから人間は笑ふ事も走る事もエンデコメノンとして有する。人間が笑ふと云ふ事が起る爲には笑ふエンデコメノンがなければならぬ。それがないのに笑ふと云ふ事は矛盾である。然しそれのみでは笑は起らない。エンデコメノン・エイナイは常にエンデコメノン・メー・エイナイを伴ふ。(一四三)人間は笑ひえぬものではなくて笑ひうるものであるが、笑ひうるものである以上、同時に笑はざるをうるものでもある。然し笑ひうる事のみから笑が生じない如く、笑はざるをうる事のみから笑はないと云ふ結果は生じない。エンデコメノンは有と無の中和された狀態である。それは運動の積極的原理ではなくしてその單なる地盤である。運動はこの上に成立するが、そこから運動が生ずるのではない。運動の原理としてのデュナミスはエンデコメノンの上に成立して之の中和性を破る原理である。(一四四)そしてエンデコメノンの中和性はそれが基體を缺く事に基く。エンデコメノンは受動的可能に類し乍ら、この無基體性と云ふ點に於て受動的可能とも異る。それは又基體としての實在性を缺くから、特に受動的可能に限らず能動的可能の方からも違せられる。それはむしろ能動とか受動とがの別をこえた一般的概念の間の關係である。

(一二九) An. Pr. A, 2.

(一三〇) Ibid. 3, 25, a, 38. De Interpr. 13, 22 b, 11; 29; 23, a, 9: ὅτι ἤδη ἔστι κατ' ἐνέργειαν ὃ λέγεται εἶναι δυνατόν. 然しこの下の文は不鮮明なものに解釋せられる —— Ibid. 11: καὶ αὕτη μὲν (e. i. ἡ δύναμις τοῦ βαδίζειν ὅτι βαδίσειεν ἄν) ἐπὶ τοῖς κινητοῖς ἐστὶ μόνοις, ἐκείνη δὲ καὶ ἐπὶ τοῖς ἀκινήτοις. Phys. Γ, 4, 203, b, 30: ἐνδέχεσθαι ἢ εἶναι οὐδὲν διαφέρει ἐν τοῖς ἀϊδίοις.

(一三一) De. Interpr. 13, 23, a, 21; Met. θ, 8, 1050, b, 18.

(一三二) De Gen. An. B, 1, 731, b, 25; De Gen. et Corr. B, 11, 337, b, 8; 338, b, 19.

(一三三) Eth. Nic. Γ, 5, 1112, a, 21; Met. H, 8, 1050, b, 22; b; 28; Λ, 7, 1072, b, 7; An. Post. B, 11, 94, b, 27; Gen. et Corr. B, 11, 337, b, 13; Part. An. A, 1, 642, a, 35.

(一三四) Phys. B. 9, 200, a, 15; Met. Γ. 5, 1015, b, 6.

(一三五) Eth. Nic. Z, 3, 1139. b, 20.

(一三六) Eth. Nic. Z, 1, 1139, a, 6; De An. Γ, 10, 433, a, 29. 但し他樣なりうる個別的現象にして而も理論的認識の對象であるものが認められる。例へば明日雨が降るか否かは一般的見地からして他樣なりうる事であるが、而もそれは人間の作爲を超越する領域に屬するから、理論的認識の對象でありうる。但し斯かる偶然的現象の認識は廣義な意味での ἐπιστήμη ではなくして δόξα である。

(一三七) Loening, Zurechnungslehre des Aristoteles, 158 ff.

(一三八) Meteor. B, 4, 360, b, 5 ff.

(一三九) Joachim, Aristotle, On Coming-to-be and Passing-away. Introduction, xxvii-xxviii: But such apparent exceptions disappear on closer inspection. For the cause, which links such πάθη to their subjects, further determines and purifies either the πάθη or the subjects in such a way that the connexion *when demonstrated* (i. e. the mediated nexus which is the 'conclusion' of the ἀπόδειξις) is commensurate and reciprocal, Thus (not moon in general, but) moon in such

a position that the earth screens it from the sun is deprived of light. And *this* deprivation of light—viz. one caused by the ἀντίφραξις γῆς—is lunar eclipse, a *proprium* of moon. Moon-qua-screened-by-the-earth is deprived of light commensurately and timelessly. And the noise, which is thunder, occurs inevitably and invariably in the clouds in so far as fire is quenched in them: that noise—viz. the noise caused by the quenching of fire—is a proprium of clouds. Finally, growing grey is one amongst the alternatives of a 'disjunctive' *proprium* of man. For man, in so far as increasing age destroys the hair-sacs or follicles, must either grow grey or grow bald, as inevitably as number must be either odd or even, and line straight or curved.

(一四〇) De. Interp 9, 19, a 23 ff. τὸ μὲν οὖν εἶναι τὸ ὂν ὅταν ᾖ, καὶ τὸ μὴ ὂν μὴ εἶναι ὅταν μὴ ᾖ, ἀνάγκη· οὐ μὲν οὔτε τὸ ὂν ὅταν ἀνάγκη εἶναι οὔτε τὸ μὴ ὂν μὴ εἶναι. οὐ γὰρ ταὐτόν ἐστι τὸ ὂν ἅπαν εἶναι ἐξ ἀνάγκης ὅτε ἔστι, καὶ τὸ ἁπλῶς εἶναι ἐξ ἀνάγκης.

(一四一) Met. E, 7, 1032, a, 13; B, 4, 999, b, 7; θ, 8, 1049, b, 25; Phys. A. 4, 187, a, 33; Rhet. A, 7, 1364, a, 11, etc.

(一四二) De. An. B, 5, 417, a, 22 ff. ἔστι μὲν γὰρ οὕτως ἐπιστῆμόν τι ὡς ἂν εἴπομεν ἄνθρωπον·ἐπιστήμονα, ὅτι ὁ ἄνθρωπος τῶν ἐπιστημόνων καὶ ἐχόντων ἐπιστήμην· ἔστι δ' ὡς ἤδη λέγομεν ἐπιστημόνων καὶ ἐχόντων ἐπιστήμην· ἔστι δ' ὡς ἤδη λέγομεν ἐπιστήμονα τὸν ἔχοντα τὴν γραμματικήν· ἑκάτερος δὲ τούτων οὐ τὸν αὐτὸν τρόπον δυνατός ἐστιν, ἀλλ' ὁ μέν ὅτι τὸ γένος τοιοῦτον καὶ ἡ ὕλη, ὁ δ' ὅτι βουληθεὶς δυνατὸς θεωρεῖν, ἂν μή τι κωλύσῃ τῶν ἔξωθεν. 此線二ノ道具ヤウノ δύναμις ハ勝設ノ試作的可能ヤウニ。

(一四三) An. Pr. A, 13. 32, a, 36: ἐπεὶ γὰρ τὸ ἐνδεχόμενον οὐκ ἔστιν ἀναγκαῖον, τὸ δὲ μὴ ἀναγκαῖον ἐγχωρεῖ μὴ ὑπάρχειν, φανερὸν ὅτι, εἰ ἐνδέχεται τὸ Α τῷ Β ὑπάρχειν, ἐνδέχεται καὶ μὴ ὑπάρχειν· καὶ εἰ παντὶ ἐνδέχεται ὑπάρχειν, καὶ παντὶ ἐνδέχεται μὴ ὑπάρχειν.

(一四四) 下ニナッテカラノ動的ニ方程式ニハ下ニスルノ靜的ノ方程式ハ次ノ一文ニヤ何ハれる。 Met. θ, 3, 1047, a, 20. ὥστε ἐνδέχεται δυνατὸν μέν τι εἶναι μὴ εἶναι δέ, καὶ δυνατὸν μὴ εἶναι εἶναι δέ, 但シ此ノ ἐνδέχεται ハ時ニハ (De Interp. 12, 21, b, 10) δύνασθαι ヤウニ譯メラれる時ヤある。 終リ勿論此ノ際ニハ δύναμις ガ ἐνδεχόμενον ヲ含ム故ニ道具ヤウ用ヒラれヤウニ解ケル

きである。

エンデコメノンは上述の如く存在と非存在を平等な中和的契機として含むものであるが、アリストテレースは斯くの如きエンデコメノンを更に詳しく分つて、一は概して起る事にして而も必然と迄は言ひえないもの、他は不定的なもの、斯くあり又斯くあらざることが可能なものとする。前者は例へば人間が白髮になるとか成長するとか、老衰するとか云ふ事、或は一般的に言へば本性的に屬することである。之等の現象がいつでも必然的であるのではない理由は基體を成すところの人間が常に實在するものなのではないからである。然し人間が實在するならば之等の事象は必然的であるか或は蓋然的なのである。之に對して後者は例へば動物が歩く事或は歩いてゐる時にたまたま地震が起るとか、或は一般に偶然によつて起る事である。本性的に起る事は一方的な傾向性をもつが、偶然的な事は反對項の中の特に一方が起り易いといふ事はないのである。本性的なエンデコメノンを表はす命題も偶然的なエンデコメノンを現す命題も共に對立する命題によつて置換されることが出來る。然し乍らその仕方は同一ではなく、本性的にあるものに於ては、それが必然的に存在するのではない爲であり、他方不定的なもの偶然的なものにあつては斯くの如くある事がその反對である事よりも優れた權利を持たぬ爲である。本性的なものについては學や證明的推論が成立しうるが、不定的なものは、それの媒辭も亦不定的である爲、學や推論の對象領域から除外される。(一四五) 斯くの如きエンデコメノンの二義は、一は對立契機が全く平等であつて何等の傾向性を持たぬのに、他は一契機が他契機に對して或程度の優越性を含む事によつて區別される。此區別は我々が原本的な意味に於ける實在的デュナミスと觀念的可能としてのエンデコメノンとの間に認めた關係にひとしい。然らばエンデコメノンは必ずしも肯定と否定の中和を意味しないので

あらうか。或は第一のエンデコメノンは勝義のデュナミスに當ると解すべきであらうか、然し上述の例についてみるのに、人間が白髮になるとか成長するとかいふ事は、なるほど白髮にならぬとか成長せぬ事に對して優れて人間の本性に屬する事ではあるが、之を以て直ちに勝義のデュナミスとする事は出來ない。蓋し此エンデコメノンの基體は人間一般であつて個々の現實的人間ではない。卽ち個々の現實的人間が存在すれば、今迄エンデコメノンであつたものは必然的にあるか又は蓋然的にあるであらうと言はれるが、現實的人間が存在する時、直ちに必然的又は蓋然的になる事とは如何なる現象であらうか。それは未だ白髮や成長其事ではない。何故ならば人間は唯年老いてのみ白髮になり、或は年を經てのみ成長する事が必然的乃至蓋然的だからである。單に現實的人間が存在する事によつて直ちに必然的乃至蓋然的に存在するに到るものは、白髮や成長その事ではなくして、白髮になつたり成長したりする實在的可能に他ならない。斯かる實在的可能は現實的實在的な人間にのみ內在するものであつて單なる人間の概念に屬するエンデコメノンとは區別されなければならない。エンデコメノンの第一義に於ても白髮や成長に向ふ方向は、その反對の方向に比して優位を占めるが、その優位は未だ觀念的優位であつて實在的優位ではない。然るにこの人間一般の概念が具體的人間の存在によつて實在的に充足される時、この基體の充足に對應してエンデコメノンの有する觀念的優位はデュナミスの有する實在的優位によつて置換され、この充足によつて初めて單なる觀念的可能の中和性から實在的可能の發動性が萌すのである。而して觀念的可能としてのエンデコメノンの一項が反對項に對して有する觀念的優位とは、實在的現象の統計によるものである。例へば人間に於て歩くと云ふ事が歩かぬ事にまさつてエンデコメノンであるのは、多くの現實的人間が歩くと云ふ事實に立脚する。隨てエンデコメノンの一項の優位は實在的可能の反映に他

ならない。

エンデコメノンが觀念的可能であるのに對してデュナミスは勝義に於て實在的可能であり、デュナミスの基體を漸次捨象してゆく時には次第にエンデコメノンに接近することは前述の如くである。この事は右にのべたエンデコメノンの二つの意味の區別の中にも看取する事が出來やう。卽ちエンデコメノンの二義は仔細に考へれば絕對的な區別ではない。先づ本性的なエンデコメノンについてみるに人間が白髮になるといふ事は白髮にならぬ事に對して優位を占めるが、白髮である事は白髮でない事に對して全く平等である。何故ならば人間は白髮である事も白髮でない事もあるからである。同じく白髮といふ事が人間に對する關係の仕方によつて、或は人間の把捉の仕方によつて、本性的であつたり偶然的であつたりする。他方偶然的不定的なエンデコメノンの例についても、人間が步行することは人間にとつて偶然的であるとしても、步行的であることは人間の本性に屬する。人間が步いてゐる時に地震が起ると言ふ如く全き偶然的現象に於ては、斯くの如き變樣によつて不定性を蓋然性とする事は困難であるが、それは斯かるエンデコメノンが殆ど基體を缺くが爲である。エンデコメノンの不定性は現象又は屬性とその基體との關係の緊密性に逆比例する。而して基體が抽象的である程不定性は大きくなり、現象の把捉が抽象的である程其不定性は減少する。人間が白髮になる事が人間の白髮である事より蓋然的であるのは、前者に於ては基體としての人間が時間的經過の中に把へられて、より具體的である爲であり、人間が步行する事が人間が步行的である事より不定的であるのは、前者に於ては步行の現象が後者に於けるより具體的な形で把へられるが爲である。そして此不定性の最も大きいのは基體が全く空虛であつて現象が全く具體的な場合であり、前例についてみれば人間が步行中に地震が起ると云ふ事が正に之に該

當する。反對に現象が抽象的にとらへられるか、或は基體が具體的に充足されれば、それに應じて不定性は蓋然性に轉じ必然性に接近する。勝義のデュナミスに於てはその基體は充全的に規定された具體的な現實存在であるが、エンデコメノン其者の中にも其不定性に程度の差があり、或ものは勝義のデュナミスに接近し或ものは之を遠ざかる。

この事は逆にデュナミスも亦或ものはエンデコメノンに接近するものと之と對立するものの分れる事を意味する。我々が先に指摘した如くデュナミスが其原本的な意味を失つて次第に中性的な觀念的可能に接近するとは此事に他ならぬ。我々は斯くの如き推移關係をアリストテレースの用語法其ものの中に看取する事が出來る、エンデコメノンは勝義に於て觀念的可能であり、デュナミスは勝義に於て實在的可能として、其外延に於て前者は後者を包攝する如く考へられるが、それと共に兩概念は屢混用せられ、時にはエンデコメノンの定義が其儘デュナミスの定義に代用されるのが認められる。例へばデュナミスを實在的に定義せる形而上學第九卷の第三章に於て「若し能力を持つと云はれるものの現實態が存する時何等の不可能も存しないであらう如きものが可能である。と云ふのは例へば若し坐つてゐる事が可能であり又坐つてゐる事がありうるならば、このものが坐つてゐる事があつても何等の不可能も存しない」(一四六)と言ふ如き場合、デュナミスはエンデコメノン以上の實在性を持たない。同樣に解釋論第十二卷に於て「而して同じものがあることもあらぬことも可能であると考へられる。即ち切られたり歩く事の可能なものは、歩かず又切られない事も可能だからである。其理由は斯くの如く可能なものは凡て常に現實的であるのではない。だからそれには否定も亦屬するであらうからである。即ち歩きうる者は又歩かない事も可能であり、見られうる者は見られない事も可能であるからである。」(一四七)或は「(ある事が可能であるとあらぬことが可能であるとは)相互に隨順すると思はれる。何故

ならば同じものがある事もあらぬ事も可能だからである。即ち斯くの如きものは相互に矛盾項ではない。」(一四八)と言ふ如きデュナミスの用法は全くエンデコメノンに一致する。

デュナミスとエンデコメノンを、一は實在的可能を現し他は論理的可能を現すものと區別する論者にはヴィツ、ボーニッツ、ブランディスの如きがあり、兩概念の區別を否定する者には、ツェラー、プラントゥル、マイエル等がある。(一四九)プラントゥルはアリストテレースの客觀主義に於ては論理的可能と實在的可能の別は全く認められないと主張し、マイエルは之に同意して形而上學第九卷第三章の上掲の命題や分析論前篇第一卷第十三章に於ける兩概念の定義の一致を其證據となし、又自然學第七卷第五章、形而上學第五卷第十二章でデュナトンを規定する仕方はヴィツの考の誤なることを示すと云ふ。然し之等の箇所に於てエンデコメノンと同一視されるデュナトンは勝義のデュナトンではなくその派生的な意味であつて、アリストテレースが斯かる論理的可能概念を實在的可能概念と區別してゐることは先に述べた如くである。(一五〇)デュナトンの或意味がエンデコメノンに一致すると言ふ事はヴィツやブランディスと雖も敢て否定しないが、その故を以て兩概念が無差別だと云ふのは早計である。エンデコメノンの代りにデュナトンを代用する事は屢認められること上掲の如くであるが、逆にデュナミスの定義に現れた如き實在的可能概念を現はすにエンデコメノンを以てした一箇所は一箇所もないのである。(一五一)然し乍らアリストテレースのエンデコメノンを以て中世のスコラに於てみる如き論理的可能と解し、其内容を論理的矛盾なき事によつて規定するヴィツの說も其儘許容する事は出來ない。この事は私が之迄故意に論理的可能と云ふ概念を避けて觀念的可能と云ふ語を用ひ來つた所以である。上來の所說によつても伺はれる如く、エンデコメノンは勿論具體的個別的基體を要しないが、而もそれが基體と

なる所の一般的概念に對して有する關係は單なる論理的矛盾の缺如に止まらずして何等かの程度に於ける統計的事實に基く事である。人間に於て笑と云ふ事がエンデコメノンであるのは人間が時として笑ふと云ふ事實に基く。笑は勿論人間の概念と矛盾はしない。然し單に矛盾がないのみならば人間が十丈の身長を持つ事も全く同樣に矛盾を持たぬから、全然同樣にエンデコメノンである筈である。然しそれは笑と異つて自然の統計的事實に反し、隨てエンデコメノンたる事が出來ぬか、或は極めて小さなエンデコメノンを有するにすぎぬ。エンデコメノンは斯くの如く統計的事實に基く故、論理的可能とは異つてその中に無限に多樣な程度の相違を含む概念である。その無限な多樣性の中で具體性の多いものは實在的可能に接近すると共に、抽象性の著しいものは論理的可能に移行し、アリストテレース自身も無限の如きは單に考へられるのみであつて決して實現する事なき可能である事を認めてゐるのである。(一五二) 隨てアリストテレースが論理的可能を考へなかつたとは云へぬが、而もエンデコメノンを以て單なる論理的可能となすのは又其眞意を失するもの(一五三)と言はねばならない。

(一四五) An. Pr. A, 13, 32; b, 4 ff.

(一四六) Met. θ, 3, 1047, a, 24: ἔστι δὲ δυνατὸν τοῦτο ᾧ ἐὰν ὑπάρχῃ ἡ ἐνέργεια οὗ λέγεται εἶναι τὴν δύναμιν, οὐδὲν ἔσται ἀδύνατον. λέγω δὲ οἷον, εἰ δυνατὸν καθῆσθαι καὶ ἐνδέχεται καθῆσθαι, τούτῳ ἐὰν ὑπάρχῃ τὸ καθῆσθαι, οὐδὲν ἔσται ἀδύνατον.

(一四七) De Interpr. 12, 21, b, 12: ἔοικεν δὲ τὸ αὐτὸ δύνασθαι καὶ εἶναι καὶ μὴ εἶναι πᾶν γὰρ τὸ δυνατὸν τέμνεσθαι ἢ βαδίζειν καὶ μὴ βαδίζειν καὶ μὴ τέμνεσθαι δυνατόν. λόγος δέ, ὅτι ἅπαν τὸ οὕτω δυνατὸν οὐκ ἀεὶ ἐνεργεῖ, ὥστε ὑπάρξει αὐτῷ καὶ ἡ ἀποφασις. δύναται γὰρ καὶ μὴ βαδίζειν τὸ βαδιστικὸν καὶ μὴ ὁρᾶσθαι τὸ ὁρατόν. Rhet. B, 19, 1392, a, 9: ἐν δὴ τοιούτοις ἢ δυνατὸν ἢ εἶναι ἢ γενέσθαι, καὶ τὸ ἐναντίον δόξειεν ἂν εἶναι δυνατόν, οἷον εἰ δυνατὸν ἀνθρωπον ὑγιασθῆναι, καὶ νοσῆσαι· ἡ γὰρ αὐτὴ δύναμις τῶν

ἐναντίον, ἢ ἐναντία. Cf. Met. θ, 9, 1051, a, 5 ff. 註九八、註六四。

(一四八) De Interpr. 12, 21, b, 35 : διὸ καὶ ἀκολουθεῖν ἂν δόξειεν ἀλλήλαις· γὰρ αὐτὸ δυνατὸν εἶναι καὶ μὴ εἶναι· οὐ γὰρ ἀντιφάσεις ἀλλήλων αἱ τοιαῦται, κτλ.

(一四九) Waitz, Arist : Organon. I. 376, 398 f. ad 31, b, 8. ; Bonitz, Comm. zur Met. 387. ; Brandis, Handbuch. d. gr.-röm, Ph. III. 1, 21, Anm. 29 & 30. ; Zeller, Philos. d. Gr. II. 2. 223, Anm. 3. ; Prantle, geschichte der Logik. I. 166f. ; Meier, Syllogistik d. Arist. I. 194.

(一五〇) 註五參照

(一五一) Ross' Comm. ad. 1019, b, 32.

(一五二) Met. θ, 6, 1048, b, 10.

(一五三) Cf. Faust, Op. cit. § 8.

四

上來我々はデュナミスが實在的な可能から論理的な可能に移行し、其一方的動性が兩方的靜止性となつてゆく過程を、受動的なデュナミスからエンデコメノンへの方向に沿つて觀察した。之に對してデュナミスの原本的な實在的概念はより多く能動的可能の側に認められる。而して恰も受動的可能に於て基體の具體性に應じて實在性と觀念性の程度の差のあつた如く、我々は能動的可能そのものの中にも之と類比的な段階の分たれるのを看取する。卽ちアリストテレースはデュナミスに能動的と受動的とを分ち能動的可能に有理的なものと無理的なものを分つに止まらず、更に別の見地から此能動的可能に二つの段階を分つ。(一五四) 此二種の能動的可能には差當り特殊の名が與へられず實例を以て區

別される。(一五五)即ち一は學習者の持つところの思惟する能力であり、他は既に學習し終へて知識を持つてゐる者が現實的には思惟してゐない休止狀態に於て持つ所の思惟の能力である。(一五六)兩者が思惟と言ふ現實に對して有する關係の相異は一方學習者が未だ思惟の形相を自己の中に持たず、形相は教授者に由來して學習者は唯受動的であるのに對して、知識ある者に於ては思惟の形相が既に自己の中に存する事である。隨て前者は未だ彼自身獨立に他者をまたずして思惟を實現することはない。彼は學び終えて知識ある者となつた時に始めて獨立的に思惟を實現する直接的能力を有するであらう。然し乍ら學習者の思惟に對する能力は單なる思惟の受動的可能ではない。學習者の持つ受動性とは教授の形相の可能態である。即ち彼は教へられうる者であるが思惟されうる者でもなければ學ばれうる者でもない。彼は學習に對する能動的可能と思惟に對する能動的可能を併せ持つてゐる。(一五七)然しこの中思惟に對する能動的可能は學習者に於ては間接的であり、二重の意味で可能態である。之は其形相に對應する質料と合し、外的障害がなくても直ちに其形相を實現する事は出來ない。學習者に書物が與へられても彼は未だ讀む事が出來ない。彼は唯教へられつつ讀みうるのみである。教へられつつ讀む者には讀む事の形相即ち知識は內在せず、教師に內在する形相が學習者を通じて實現するに過ぎない。學習者の讀書する可能性は兩方向的でない迄も無方向的である。それは無力な觀念的可能性であつて運動の原理を他者にまたねばならぬ。然るに知識ある者が本を與へられた時彼の知識はその實現を妨げる外的條件の存せざる限り、それ自ら他の力を借りずして實現する。彼の思惟能力は一方的であり自動的である。(一五八)後世スコラ學者は學習者の思惟能力を第一可能(potentia prima)、知者のそれを第二可能(potentia secunda)と呼び、第一可能から第二可能になるのを第一活動(actus prior)第二可能から現實に至るのを第二活動(actus secundus)と呼ん

た。(一五九) 然るに第一可能が第一活動になるのは自動的ではなくして他者から形相を與へられる事による。即ち學習者は教授の受動的可能をもち、教授者の能動的可能（第二可能）から形相をうけとる事によつて知識を獲得するのである。

(一五四) Phys. θ, 4, 255, a, 30 ff; Cf. De An. B, 1, 412, a, 22.

(一五五) De An. B, 5, 417, b, 29 ff: τοῦ μὲν ὥσπερ, ἂν εἴποιμεν τὸν παῖδα δύνασθαι στρατηγεῖν, τοῦ δὲ ὡς τὸν ἐν ἡλικίᾳ ὄντα, ... ἐπεὶ δ' ἀνώνυμος αὐτῶν ἡ διαφορὰ διώρισται δὲ περὶ αὐτῶν ὅτι ἕτερα καὶ πῶς ἕτερα, χρῆσθαι ἀναγκαῖον τῷ πάσχειν καὶ ἀλλοιοῦσθαι ὡς κυρίοις ὀνόμασιν.

(一五六) De An. B, 1, 412, a, 9: ἔστι δ' ἡ μὲν ὕλη δύναμις, τὸ δ' εἶδος ἐντελέχεια, καὶ τοῦτο διχῶς, τὸ μὲν ὡς ἐπιστήμη, τὸ δ' ὡς τὸ θεωρεῖν. 22: αὕτη (e. i. ἐντελέχεια) δὲ λέγεται διχῶς, ἡ μὲν ὡς ἐπιστήμη, ἡ δ' ὡς τὸ θεωρεῖν. Ibid. 412, b, 5; Γ, 4, 429, b, 8.

(一五七) 思惟とは思惟對象が思惟主觀に働きかける結果である。 De An. Γ, 4, 429, a, 13: εἰ δή ἐστι τὸ νοεῖν ὥσπερ τὸ αἰσθάνεσθαι, ἢ πάσχειν τι ἂν εἴη ὑπὸ τοῦ νοητοῦ ἢ τι τοιοῦτον ἕτερον. ἀπαθὲς ἄρα δεῖ εἶναι, δεκτικὸν δὲ τοῦ εἴδους καὶ δυνάμει τοιοῦτον ἀλλὰ μὴ τοῦτο, καὶ ὁμοίως ἔχειν, ὥσπερ τὸ αἰσθητικὸν πρὸς τὰ αἰσθητά, οὕτω τὸν νοῦν πρὸς τὰ νοητά. Ibid, 8, 431, b, 26: τῆς δὲ ψυχῆς τὸ αἰσθητικὸν καὶ τὸ ἐπιστημονικὸν δυνάμει ταὐτόν ἐστι, τὸ μὲν ἐπιστητὸν τὸ δὲ αἰσθητόν. だから思惟活動はその內容たる形相に即してみれば受動的である。然しそれは思惟者が思惟の受動者たる事ではなく、寧ろ思惟の能動的原理たる對象の方が思惟活動の受動者となる。思惟の對象は思惟されるものである。 Met. θ, 8, 1050, a, 34: ὅσων δὲ μὴ ἔστιν ἄλλοθι ἔργον παρὰ τὴν ἐνέργειαν, ἐν αὐτοῖς ὑπάρχει ἡ ἐνέργεια οἷον ἡ ὅρασις ἐν τῷ ὁρῶντι καὶ ἡ θεωρία ἐν τῷ θεωροῦντι κτλ. 本來思惟と知覺とは事態は全く同一ではなく、思惟對象の或者は普遍的なものであるから思惟主觀に內在するが、知覺及び知覺對象に關する知識とは對象は主觀の外にある。 De An. B, 5, 17, 6, 19: διαφέρει δέ, ὅτι τοῦ μὲν τὰ ποιητικὰ τῆς ἐνεργείας ἔξωθεν, τὸ ὁρατὸν καὶ τὸ ἀκουστόν, ὁμοίως δὲ καὶ τὰ λοιπὰ τῶν αἰσθητῶν. αἴτιον δ' ὅτι τῶν καθ' ἕκαστον ἡ κατ' ἐνέργειαν αἴσθησις, ἡ δ' ἐπιστήμη τῶν καθόλου·

τοῦτο δ' ἐν αὐτῇ πώς ἐστι τῇ ψυχῇ.

(一五八) De An. B, 5, 417, b, 10. εἰς ἐνεδλήχισαν ἴσην ἐκ δυνάμει ὅντος κατὰ τὸ νοοῦν καὶ φρονοῦν οὐ διδασκαλίαν ἀλλ' ἑκάστην ἐπωνυμίαν ἔχειν δίκαιον τὸ δ' ἐκ δυνάμει ὄντος μανθάνον καὶ λαμβάνον ἐπιστήμην ὑπὸ τοῦ ἐνεδλεχήσαι ὅντος καὶ διδασκαλικοῦ ἤτοι οὐδὲ πάσχειν φασέον, [ὥσπερ εἴρηται,] ἢ δύο τρόποι τινὲς εἶναι ἀλλοιώσεως, τήν τε ἐπὶ τοῖς στερήσεις διαθέσεις μεταβολὴν καὶ τὴν ἐπὶ τοῖς ἕξεις καὶ τὴν φύσιν.

(一五九) Cf. Ross' Comm. on Phys. 696.

第一可能と第二可能の別は有理的能力にも無理的能力にも同樣に妥當する。學習者の思惟に對する能力は冷たき物が熱する能力や水の上昇する能力にひとしく、知識ある者の思惟に對する能力は熱き物が熱したり火が上昇したりする能力にひとしい。(一六〇) 第二能力は受動者と合し且外的障害がなければ直ちに實現する。そして此熱したり上昇したりすることは夫々熱き物や火の本質に屬する。それが反對又は矛盾的結果を生ずるのは、外的な力によるものであつて、此能力其者には由來しない。然し第二可能は妨げられねば實現しない事があるから、依然として可能であつて未だ現實ではない。但しこの實現しないと言ふ方向への可能性はエンデコメノンであつて勝義のデュナミスの如き實在的積極的な傾向性ではない。(一六一) 隨て第一可能とは實は兩方向的靜止的な觀念的可能たるエンデコメノンに他ならないか、或は少くとも之に類するものであると言へやう。卽ち人間は概して思惟する存在である故に、人間が人間たる事によつて有する思惟の可能性が第一可能である。

之に反してデュナミス概念の定義に現はれた如き勝義の實在的一方的運動原理にして、上述の第二可能に當るものはアリストテレースに於てはヘクシスと言ふ概念に認められる。此語はもと持つ事を意味する ἔχειν と言ふ動詞に由來するから、單なる許容を意味するエンデコメノンに對するのみならず、デュナミスに對しても一層現實性の傾向が

濃厚であり、寧ろエネルゲイアの概念に接近する。卽ちエケインと言ふ動詞は他動詞としては何かを持つ事であり、自動詞としては自己を或狀態に保持する事である。隨てアリストテレースに於ても之から生じたヘクシスに此兩義の別が認められ(一六二)、前者に對應するヘクシスは持つと言ふ働きであり、後者に對應するものが主體の性質を意味するに到ると考へられてゐる。例へば持つ者と持たれる物との間の關係としての所有作用は前者であり(一六三)、次にそれによつて善く又は惡くあるところの狀態、例へば健康と呼ばれるものは後者に當る。然しアリストテレースの哲學用語としてのヘクシスはエネルゲイアやエンテレケイアに對する概念として用ひられ(一六四)、より多く自動詞的なエケインに由來して主體の性質を現すものである(一六五)。但しこのヘクシスの兩義は單に偶然的なものではなく(一六六)、第二義の根柢には第一義が前提されねばならない。

第二義のヘクシスは單なる狀態(διάθεσις)に止まらない(一六七)。狀態は一時的であるがヘクシスは永續的である(一六八)。而も此永續性は純粹形相の永遠性の如く不變的ではない(一六九)。斯くの如き永遠性は決して動力因となる事はなく、唯目的因としてのみ原因たりうるであらう。然るにヘクシスは決して斯かる永遠的本質ではなく、唯具體的個別的存在の屬性として之に內在するものである。例へば人間の本質は人間の成長なり生殖に於ける目的因となるであらうが、それはヘクシスではない。健康がヘクシスであると云ふ時にも、それは決して目的として實現さるべき健康ではなくして自ら動力因となる如き健康である。ヘクシスの永續性は寧ろそれの有する潛在的による、パトスとがディアテシスとかが永續性を持たぬ所以は、却てそれらが斯かる潛在力を持たぬ抽象的な形相を示すことによる、例へば怒は一種のパトスであり、それは怒として顯はになつてゐる。然しそれが顯はであるが爲に却て永續性を伴はない。然るに怒り易き品

性はヘクシスであり、之は怒としては潜勢的である。そこには怒は顯はになつてはゐないが、このヘクシスは常に怒を生み出すものとして持續するのである。勿論怒として顯はでなくとも、怒り易き性質としては現實的である。この現實性の面に着目すればヘクシスは一種の性質（ποιότης）である。(一七〇) 然しその持續性の內容である潜勢的形相の側から見る時は、ヘクシスこそはデュナミスでなければならぬ。(一七一) ヘクシスがデュナミスである事はヘクシスが原理、原因、或は運動の生成的原理と言ふ如き諸概念と同一視される事によつて明かであり、(一七二) 又其具體性乃至實在性はそれが何かに對するヘクシスとして關係の範疇によつて捉へられる事によつても立證される。(一七三) ヘクシスの反對概念であるステレーシスが單なる非有ではなくして或現實的基體が、其本性上又は統計的にみて當然持つべき筈の屬性を何等かの事情の爲に缺いて居る狀態に限つて用ひられる事も之を裏書する。(一七四) 斯くの如くヘクシスは其基底に現實的存在を有する形相であるが、ヘクシスの本質は此現勢的形相にあるのではなく、寧ろ斯かる現實的個體の個別的な性質に必然的內面的に隨伴するデュナミスである。(一七五) だからこそそれは所有として、エネルゲイアが使用であるのと區別されるのである。(一七六) ヘクシスは所有である。卽ちそれは具體的現實的存在に內在し、この具體的存在はそれを持つ所有者として實在する。隨て第二義のヘクシスの根柢には第一義のヘクシスが豫定されねばならない。

然しヘクシスはデュナミスではあつても唯能動的なものに限られる。(一七七) ヘクシスが形相であるとして質料に對せしめられるのも之が爲である。(一七八) 然るに質料としての質料は受動的であり無形相的である。(一七九) ヘクシスが形相と共に質料に對せしめられる一方、原理或は運動の原理と同一視される事は、それが最勝義のデュナミスを現す證であらう。斯くして能動的デュナミスの中、スコラ學者によつて第二可能と呼ばれるものに當るところのヘクシスは當然實在的に一方

的な傾向性でなければならぬ。そして此第二可能が特にヘクシスと呼ばれる時には、デュナミスと云ふ概念は却て質料に內在する受動的可能乃至エンデコメノンに限定され、ヘクシスは之に對立せしめられる。かくして「同一のデュナミスや知識は反對のものに關ると考へられるが、同一のヘクシスはさうではない」(一八〇)と言はれる。若し反對對立のヘクシスが同一であつたら、それと質料との合一からは反對の結果が同時に實現する事とならう。然らずして一方のみが實現する爲には決定契機が能動者に內在する事が必然的である。此一方性を成立せしめるのは能力の基體の現實性である。(一八一)現實性とは常に何等かの活動に他ならないから、之は更に溯れば能力そのものの原因としての現勢的活動に依存する。ヘクシスはこの先行せる活動によつて養はれた一種の把持性或は惰性であり、此把持性は先行する活動によつて育成された廣義の習性である。(一八二)習性とは內在化された活動である。それは現在活動してはゐないが、先の活動の結果にして更に將來の活動の原因をなすものである。隨てそれは一方的傾向である。(一八三)それは之に適はしい環境におかれれば他物からの動因を俟たずして自ら動力因となるものであり、之こそは正しく能力概念の第一義に相當する。兩概念の相違は唯可能性とその基體たる現實性の何れの契機を强調するかによる色合の相違に過ぎない。我々は先に知識が行爲に對しては眞に能動的な可能たりえずして却て欲求をまつて發動する事を知り、その意味で欲求こそ勝義の能動的可能である事を主張した。然るにこの欲求とはパトスの一種であり、それはヘクシスの一種たる人間の品性の發現に他ならない。品性は欲求の根源としてヘクシスであるが、欲求が行爲の根源として持つ存在論的意味は之との類比によつて行爲に對するヘクシスであると考へられやう。(一八四)

(一八〇) Phys. θ, 4, 255, a, 30 ff: ἐπεὶ δὲ τὸ δυνάμει πολλαχῶς λέγεται, τοῦτ' αἴτιον τοῦ μὴ φανερὸν εἶναι ὑπὸ τῶν τοιούτων

κινεῖται, οἷον τὸ πῦρ ἄνω καὶ ἡ γῆ κάτω. ἔστι δὲ δυνάμει ἄλλως ὁ μανθάνων ἐπιστήμων καὶ ὁ ἔχων ἤδη καὶ μὴ ἐνεργῶν. Cf. Eth Nic. A, 9, 1098, b, 31 ff.

(一长一) Ibid 255, b, 19: ἔστιν ὡς ἔτι δυνάμει (ἐνδέχεται γὰρ ἐμποδιζόμενον μὴ ἄνω εἶναι)

(一长二) Met. Δ, 20, 1022, b, 4, I. 5, 1055, b, 13; Respirat. N, 8, 474, a, 26; Gen An. II, 11, 711, a, 6.

(一长三) Met. Δ, 20.

(一长四) Eth. Nic. A, 9, 1098, b, 33, H, 13, 1152, b, 33, θ, 6, 1157,b, 6 &c.

(一长五) Eth Nic. A, 9, 1098, b, 31; H, 13, 1152, b, 33; θ, 6, 1157, b, 5; K, 6, 1176, a, 34; M. M. A, 3, 1184, b, 10; 4, 1184, b, 32; B, 10, 1208, a, 33; Eth Nic. Δ, 6, 1122, b, 1; Top. Δ, 5, 125, b, 15; Eth Nic. Γ, 8, 1114, b, 30; Rhet. A, 9, 1367, b, 32; 1369, a, 19; Eth. Eud. B, 1, 1219, a, 6.

(一长六) Faust, op. cit. I, 106. N B. I. ヤは διάθεσις の特殊的なものゝ一つにして ἕξις と τάξις に類するも ἕξις と全然無關係の同義語と解しヤるものなれども之は誤りである。

(一长七) Cat. 8, 9, a, 10: εἰσὶ δὲ αἱ, μὲν ἕξεις καὶ διαθέσεις, αἱ δὲ διαθέσεις οὐκ ἐξ ἀνάγκης ἕξεις· Rodier. Ar. Tracte de l'ame. 260. La διάθεσις peut être un état transitoire, ou purement negatuf.

(一长八) Cat. 8, 8, b, 28, 35; Wz., 9, a, 3, 9; 10.

(一长九) Brentano Psych. d. Ar. 170. Was aber an dieser Stelle unsere Aufmerksamkeit besonders in Anspruch nimmt, ist der Ausdruck ἕξις. Obwohl dieser nämlich, wie wir schon sagten, nicht blos für die Fertigkeiten und Dispositionen, sondern häufig auch in einem weiteren Sinne gebraucht wird, so kann er doch nur für Formen, die in einem Subjecte sind, seien sie nun substantielle Formen einer körperlichen Materie, oder acidentelle Formen, nie aber für eine reine substantielle Energie gebraucht werden. (vgl. Met. Δ, 12, 1019, b, 7; u. Ibid I, 4, 1055, b, 12; Wo eine ἕξις ist muss ein ἔχειν sein.)

(一七〇) Cf. Cat. 8, esp. 8, b, 27. δύναμις と ἐνέργεια は凡ての範疇に亙るものであるから、ἕξις が範疇の一つである ποιότης の一つの意味として語られると云ふ事は、それが δύναμις や ἐνέργεια とは全く別樣な存在の把握であるかの如く思はれるかも知れない。然し事實は ἕξις のみならず διάθεσις も δύναμις も ποιότης の意味を形成する。この事は矛盾ではない。δύναμις がそれの δύναμις であるところの形相即ち δύναμις の内容を構成する形相は凡ての範疇に直るものであるが、δύναμις そのものを持つ事は ποιότης の一つの意味でありうる。例へば δύναμις は人間の如き實體、白いと云ふ樣な性質、一の如き量、親の如き關係其他一切の範疇に亙つて認められる。然し人間たることの可能性、白くあることの可能性一であることの可能性、親たることの可能性を持つことは凡て實體の ποιότης であると考へられる。但し可能性が性質であることと、性質が可能的であることは同じではない。性質は可能的でもあれば現實的でもありうる。例へば實體は白くありうる事もあれば白くある事もある。然し可能的な性質は未だ現實的にこの實體の性質ではないのに、可能的であることは既に現實的な性質である。可能性は專ら性質の範疇に屬するが、逆に性質は何等かの意味に於て可能性を含むと言へやう。ποιότης には四樣の意味があり一は ἕξις, διάθεσις であり二は δύναμις φυσική ἢ ἀδυναμία であり三は παθητικαὶ ποιότητες καὶ πάθη であり四は σχῆμα, μορφή である。この内一と二に就ては上述せる所によつて明かであるが、三の παθητικαὶ ποιότης καὶ πάθη とは例へば白い黑い甘い等の如く最も普通に實體の性質と呼ばれるもので之等によつて實體が斯々であると呼ばれるものである。之は更に立入つて考へれば實體が之によつて斯々と呼ばれるのは、之等が我々の感覺を觸發する事による。例へば冷熱は人に冷熱感を與へるものとして實體の性質である。隨て之が性質であるのは ἕξις や δύναμις が實體の性質であるのと同じ根據にもとづく。知識が ἕξις として、又拳闘に巧みな事が δύναμις として人の性質であるのは、それが觀想や拳闘の原理として實體に内在することにする。之と同樣に實體に内在する冷熱は冷熱感の原理である。第四種の性質たる μορφή, σχῆμα の如き最も抽象的なものに於ては之を可能性に還元する事は困難ではある。然し之等も畢竟幾何學的可能乃至論理的可能として具體的可機能の抽象面であると解されやう隨て性質は一般に直接的或は間接的に實體の可能性であり把持性であると云ふ事が出來る。

(一七一) Eth. Nic. A, 9, 1098, b, 33 ff.; H, 13, 1153, b, 33; θ, 6, 1157, b, 6; K, 6, 1176, a, 34; Mag. Mor. A, 3, 1184,

b, 11; 15; 4, 1184, b, 32; B, 11, 1208, a, 34-b, 2; Top. Δ, 5, 125, b, 15-21. &c.

(一中二) De Gen. An. A, 19, 726, b, 19; Met. Δ, 12, 1019, b, 8.

(一中三) Cat. 8, 11, a, 22.

(一中四) Met. Δ, 22, 1022, b, 22 ff; Top. Z, 3, 141, a, 11; Cat. 10, 12, a, 26; Cf. Met. Δ, 12, 1019, b, 7; Phys. B, 1, 193, b, 19. Ross' Comm. ad. loc.

(一中五) Met. A, 3, 1070, a, 12; H, 5, 1044, b, 32; De Gen. et Corr. A, 7, 324, b, 18; Cf. Top. A, 15, 106, b, 21; B, 8, 114, a, 8; Met. Δ, 10, 1018, a, 34.

(一中六) Eth. Nic. A, 7, 1098, b, 33 ff; H, 13, 1152, b, 33; θ, 6, 1157, b, 6; K, 6; 1176, a, 34; Mag. Mor. A, 3, 1184, b, 7; 15; 4, 1184, b, 32; B, 10, 1208, a, 34-b, 2; Top. Δ, 5, 125, b, 15-21; Cf. Eth. Nic. Δ, 4, 1122, b, 1; Γ, 7, 1114, b, 30-1115. a, 3.

(一中七) De Gen et Corr. 324, b, 18: τά δ' εἴδη καὶ τά τέλη ἕξεις τινές, ἡ δ' ὕλη ᾗ ὕλη παθητικον. Met. Λ, 3, 1076, a, 18; N, 5, 1044. b, 32.

(一中八) De Gen. et. Corr. A, 7, 324, b, 18; Meteor. Δ, 10, 388, a, 21; 11, 389, a, 30.

(一中九) Phys. A, 7, 191, a, 10; De Cael. Γ, 8, 306, b, 17.

(一八〇) Eth. Nic. E, 1. 1129, a, 14: δύναμις μὲν γὰρ καὶ ἐπιστήμη δοκεῖ τῶν ἐναντίων ἡ αὐτὴ εἶναι, ἕξις δ' ἡ αὐτη τῶν ἐναντίων οὔ, κτλ. (Murètus, Rassow 上篇ノ)

(一八一) 註二八

(一八二) Eth. Nic. B, 1, 1103 b, 21; Γ, 10, 1115, b, 20, B, 2, 1104, b, 4.

(一八三) Eth Nic. H, 1, 1129, a, 11.

(一八四) Pol. H, 15, 1334, b, 17: οὕτω καὶ τῆς ψυλῆς ὁρῶομεν δύο μέρη, τὸ τε ἄλογον καὶ τὸ λόγον ἔχον, καὶ τὰς ἕξεις τὰς

τοῦτον δὲ τὸν ἀριθμόν, ὃν τὸ μὲν ἔστιν θεωρῆσαι τὸ δὲ νοῆσαι.

現實存在の本質が活動であるとすれば、その活動性の最も著しいのは生物、殊に高等な動物に於てである。隨てヘクシスと言ふ概念は習慣(ἔθος)によつて後天的に獲得された品性或は性狀(ἕξις)と密接な關係を有する。(一八五)然るに習慣や品性は自然によつて必然的に生起する現象にではなく、他樣にありうる現象(ἐνδεχόμενον ἄλλως ἔχειν)に限つて認められる。(一八六)卽ちそれは自己內の心を原理として、對立するエンデコメノンに一方的決定を與へうる存在である生物にのみ認められる。而も生物の活動が凡て習慣や品性に基くものではなく、低次の活動としては未だ習慣に迄內在化せしめられずして直接的自然的に現れる衝動的活動が存すると共に、高次の活動としての純粹觀想の如きは、學習にまつものとして之から除外される。(一八七)卽ち嚴密な意味に於ける品性は心の諸部分の中、理性に服從又は反抗するところの第二義的な有理的部分欲求的部分の習慣の結果に限定される。德が理知的德と品性的德に分たれるのもこの區別に基くものである。(一八八)然るにヘクシスは斯くの如き勝義のエートスを含むことは勿論であるが、單にそれに止まらずして上は學習によつて獲得された知識から、下は無生物の有する能力に迄及ぶ廣き外延を有する概念である。(一八九)隨てそれは必ずしも有理的無理的の別の一項に限られるものではない。のみならず習得的であると言ふ事さへその本質に屬するものとは考へられない。卽ちヘクシスの實例としては屢學習によつて獲得された知識が擧げられて居るが、(一九〇)アリストテレースの語るところによれば、一般に學習しうる者としての人間の持つ思惟の第一能力から、ヘクシスとしての第二能力に移行する過程が現實的な學習の活動であるのに對して、感覺に就ては之に類比的な第一能力から第二能力への移行は現實的な感覺によらずして親が子を生む事によつて成就されると言ふ。(一九一)隨て感覺の第一能力は人の生前に持つも

のであり、人は生れおちるより感覺の第二能力を有する者である。而も感覺は知識と同樣ヘクシスであると考へられる。(一九二)卽ちヘクシスは單に後天的習得的な能力に限らず、先天的生得的な能力をも含む。否單にそれに止まらずして生物の身體及び無生物の永續的な性質も亦ヘクシスの概念に包攝される。(一九三)例へば健康や冷熱は身體のヘクシスであり、光が物を照す性質も亦一種のヘクシスである。(一九四)ヘクシスが基體としての現實存在を要求し、其限りに於て或活動を豫想する事は前述の如くであるが、此事はヘクシスをして個體發生的な見地に於ける後天的習得的能力に限定せしめない事は之によつて明かであらう。

(一八五) Cope はヘクシスの總體がエートスであり、エトスは無生物にもみられると言ふが(Introduction to Aristotle's Rhetoric 228)その根據は示してゐない。私の知る限りではエトスやエートスを無生物に歸してゐる箇所は見當らない。コープはヘクシスをエトスの結果とのみ解した爲斯かる主張を爲すに到つたものであらう。

(一八六) Eth. Nic. b, 1, 1103, a, 19: οὐδὲν γὰρ τῶν φύσει ὄντων ἄλλως ἐθίζεται, οἷον ὁ λίθος φύσει κάτω φερόμενος οὐκ ἂν ἐθισθείη ἄνω φέρεσθαι, οὐδ' ἂν μυρίακις αὐτὸν ἐθίζῃ τις ἄνω ῥίπτων, οὐδὲ τὸ πῦρ κάτω, οὐδ' ἄλλο οὐδὲν τῶν ἄλλως πεφυκότων ἄλλως ἂν ἐθισθείη.

(一八七) Eth. Nic. Z, 2, 1139, a, 35; Pol. 6, 2, 1337, a. 39; Rhet. B, 13, 1390, a, 18; 12, 1389, a, 36; Pol. 1, 11, 1281, b, 7. H, 1, 1323, b, 3; Poet. 6, 1450, a, 1; 1449, b, 38.

(一八八) Eth. Nic. A, 13, 1103, a, 5; B, 1, 1103, a, 14.

(一八九) ἕξις と言ふ如き用語法 (Eth. Nic. Z, 2, 1139, a. 34) も ἦθος に對する ἕξις の意味の廣さを立證する。

(一九〇) Cat. 8, 8, b, 29; Pol. 4, 1, 1288, b. 17; Eth. Nic. Z, 3, 1139, b, 31.

(一九一) De An. B, 5, 417, b, 16: τοῦ δ' αἰσθητικοῦ ἡ μὲν πρώτη μεταβολὴ γίνεται ὑπὸ τοῦ γεννῶντος, ὅταν δὲ γεννηθῇ, ἔχει

ἕξει ὥσπερ ἐπιστήμην καὶ τὸ αἰσθανεσθαι. καὶ τὸ κατ' ἐνέργειαν δὲ ὁμώνυμος λέγεται τῷ θεωρεῖν διαφέρει δέ, ὅτι τοῦ μὲν τὰ ποιητικὰ τῆς ἐνεργείας ἔχουσιν, τὸ ὁρατὸν καὶ τὸ ἀκουστόν, ὁμώνυμος δὲ καὶ τὰ λοιπὰ τῶν αἰσθητῶν.

(一九二) Top. Δ, 5, 125, b,17; An. Post. B, 19.

(一九三) Pol. H, 15, 1334, b, 19; Phys. H, 3, 246, a, 10.

(一九四) De An. Γ, 430. a, 15. 其他無生物に於てもヘクシスの認められる事に就ては Phys. H, 3, 245, b, 8; De Gen. et Corr. A, 10, 327, b, 16; D: Respirat. 14, 477, b, 18; 478, a, 6; Phys. Δ, 14, 223, a, 19. &c.

然し乍ら前述の如く、ヘクシスの最も代表的なものが動物の習得的能力である以上、若し習得的な能力が兩方的であるならば、それはヘクシスが原本的な意味に於けるデュナミスとして一方的傾向を持つと言ふ事との間に矛盾を生ずる惧れがあらう。然るにアリストテレースによればデュナミスは其生成の仕方によつて、感覺の如き生得的なものと、笛吹の能力の如く習慣によるものと、技術の能力の如く學習によるものとに分たれる。そして習慣によるものと理によるものとは能力に先立つて實行がなければならぬが、生得的なものと、受動的なデュナミスとは之を要せないと言はれる。(一九五)此際ロッスは生得的なものは無理的であり、習慣によるものと學習によるものとを含む習得的なものは有理的であると解する。成程生得的能力は凡て無理的であり、有理的能力は學習をまつて後天的に獲得されるものであらう。然し乍ら茲に習慣によるものが例へば笛吹の如くであるとして、理により學習によるところの技術等から區別されてゐる以上、寧ろブランディスの如く、習得的能力必ずしも有理的ではなく、習慣によつて獲得された動物的生の低次の能力にも互ると解する方が妥當であらう。(一九六)

然るにアリストテレスは之に續けて最早生得的と習得的の別を顧慮することなく、單に無理的デュナミスは一方的

であり、受動者と合すれば必然的に實現するのに、有理的デュナミスは反對項に關はるから、受動者と合しても直ちに實現せず、此反對項を決定する契機として意思（προαίρεσις）や欲求（ὄρεξις）が入つて來なければならぬと述べてゐる。その限りに於ては習得的能力と有理的能力、生得的能力と無理的能力を同一視するロッスの解釋が蓋然性をもつことになる。茲に於て若しロッスの解釋をとるとすれば、アリストテレースの述べてゐるところは習得的有理的デュナミスは兩方向的であり、生得的無理的デュナミスは一方的であると云ふ事にならう。然し乍ら茲にアリストテレースが直接語つてゐる所は單に有理的能力の兩方向性であつて習得的能力の兩方向性ではない。而も意思や欲求によつて決定を與へられる知識とは意思に於ける質料的契機をなすところの思量的思惟に他ならない。それは觀念的可能（ἐνδεχόμενον）としての行爲の可能の範圍を思量する。然しその可能の範圍の中から何れを採り、何れを實現するかと云ふ動機を與へるのは、斯る思量的思惟ではなくして、むしろその外部の欲求であり、（一九七）そして意思とはこの思量と欲求の綜合に他ならない。（一九八）隨て行爲に於ける能動的可能性の原理は知識にではなくして欲求乃至意思に存するのである。斯くの如き知識が實在的な一方性に乏しい事は受動的可能一般の特性である。隨て眞に有理的能力の名に適はしいものは思量的思惟（βουλεύσις）を質料として之に欲求決定（ὄρεξις）の加つた意思（προαίρεσις）でなければならない。技術や知識を有理的能力として積極的可能の一種となすのは、思量的欲求（βουλευτικὴ ὄρεξις）としての意思が行爲に對して有する能動性により思量的思惟に附帶的に屬する能動性を、其本質と見誤つたのである。（一九九）

勿論私は知識一般を以て受動的であると解する者ではない。受動的なのは欲求によつて決定せらるべき思量的思惟に限る。思惟が思惟として完結する觀想活動に於ては知識は單に能動的であり、端的にヘクシスである。一方的能動的

なヘクシスとしての知識の實現とは觀想の事である。然し觀想が觀想に止まりえぬ實踐に於ては現實的なものは觀想ではなくして行爲である。觀想は行爲の手段となる。それは存在論的に言へば觀想が受動的となり、行爲が他の能動的原理としての欲求にまつと云ふ事に他ならぬ。ヘクシスとしての知識は觀想に對する能動性を持つが、行爲に對する能動性は寧ろヘクシスとしての品性又はその表現たる欲求にまつのである。知識は觀想に對してはヘクシスであり、單に斯くみられる限りに於ては、知識內容として反對的概念を持つ事はその存在論的性格に對しては全然問題にならぬ。觀想は一義的に善であり何等の決定を要せない。隨て斯かる見地からすればヘクシスとしての存在的一方性が强調される。然るに知識が行爲の手段となる時には寧ろその內容的兩方性が前面に出る。知識を或は一方的な傾向としてのヘクシスとなし、或は之に反してデュナミスとして兩方向性を歸するのは、それを單なる觀想の可能性とみるか行爲の可能性とみるかによつて生ずる相違である。更に實踐知の一種たる技術に於てさへ、之を技術外部の目的の見地からすれば、善惡の反對方向へ向けられる兩方向的デュナミスと規定しつゝ、他方其技術の本質たる卓越性の見地からすれば一方的なヘクシスと解してゐる。隨て有理的デュナミスの兩方向性の說はそれのみではヘクシスの實在的一方性を脅かすものではないのである。

假に有理的能力に關する上述の議論を度外視しても尙有理的能力と習得的能力、無理的能力と生得的能力の平行關係は維持され難い。何故ならば有理的能力が兩方向的であり、無理的能力が一方的であるのは、その能力の關はる目的としての形相に關してであるが、生得的能力例へば感覺が一方的であり、習得的能力例へば知識が兩方的であるのは、價値的見地からして優劣の種別を容れるか否かの別である。生得的能力は受動性と合して必然的に一方的實現を

するが、習得的能力はその上に何等かの動機を要すると言ふのではない。技術や品性が生得的能力と區別されるのは前者が善惡、優劣の認められるものたるに反して後者が價値的差別なき一樣性に止まる爲に他ならない。

而も價値的兩方性と存在的兩方性は常に相反するのではない。寧ろ一般的見地からして價値的兩方性の認められる習得的能力こそ個別的見地からしては價値的一方性を持つ。品性は一般的見地からすれば善くも惡くもありうるが、それ故にこそ此個人の有する固有の品性は價値的に一方的に規定された善き品性なのである。之に反して一般的見地からして一方的である生得的能力は、個別的見地からすれば善にも惡にも發展しうるものとして却て兩方的である。そして個別的價値的一方性は實在的可能性の一方性と相伴ふ。例へば未だ思惟した事のない者の持つ生得的思惟能力は單なる第一可能であつて、思惟對象と合しても未だ直ちに實現するに足らぬのに、思惟によつて習得した知識は第二可能であつて、斯かる條件の下に於て必然的に特殊の思惟に實現するのである。隨て有理的能力の內容的兩方性も習得的能力の一般的價値的見地からする兩方性も、共に習得的能力又はヘクシスの形式的一方性、或は個別的存在的見地からする一方性と矛盾するものではない。我々は之を倫理學に於てデュナミスとヘクシスの別について語られる言葉によつ裏書する事が出來る。

(一九五) Met. θ, 5, 1047, b, 31; ἁπασῶν δὲ τῶν συνιόντων οὐσιῶν τῶν μὲν συγγενῶν, οἷον τῶν αἰσθήσεων, τῶν δὲ ἐθῶν οἷον τῆς τοῦ αὐλεῖν, τῶν δὲ μαθήσει οἷον τῆς τῶν τεχνῶν, τῆς μὲν ἀνάγκη προεκβεβηκέναι ἕξιν, ὅσαι ἔθει καὶ λόγῳ, τῆς δὲ μὴ τοιαύτας καὶ τῆς ἐπὶ τοῦ πάσχειν οὖν ἀνάγκη.

(一九六) Brandis, Handbuch usw. III. 1. 81.

尤も笛吹は技術の一種と認められ、技術は或るロゴスを豫想する事は否定出來ない。エトスに由來する性狀的德 (ἠθικὴ ἀρετή)

は人間の無理的部分の德ではあるが、それはロゴスに從ふ品性であり、ロゴスに從ふ活動の結果でもある。(Eth. Nic. A, 13, 1103, b, 25) 笛吹術にしても性狀的德にしても、或意味でロゴスによつて獲得される。然しそれは直ちに有理的能力とも言へない。有理的能力とは純粹に有理的部分の能力であるが、エトスによる能力は二次的有理的部分の能力であるか、少くとも之を含むものとして、一應有理的能力とは區別さるべきであらう。

(一九七) De An. Γ, 10, 433, a, 21: ἐν δέῃ τι τὸ κινοῦν τὸ ὀρεκτικόν. b, 14: τὸ δὲ κινοῦν διττόν, τὸ μὲν ἀκίνητον, τὸ δὲ κινοῦν καὶ κινούμενον: ἔστι δὲ τὸ μὲν ἀκίνητον τὸ πρακτὸν ἀγαθόν, τὸ δὲ κινοῦν καὶ κινούμενον τὸ ὀρεκτικὸν κτλ.

(一九八) Eth. Nic. Γ, 5, 1113, a, 10: καὶ ἡ προαίρεσις μὴν εἴη βουλευτικὴ ὄρεξις τῶν ἐφ' ἡμῖν. ἐκ τοῦ βουλεύσασθαι γὰρ κρίνομεν ὀρεγόμεθα κατὰ τὴν βουλεύσιν. 又 προαιρεσις に就ては拙著アリストテレースの倫理學七四頁以下參照。

(一九九) 但し De An. Γ, 10, 433, a, 21: ἐν δέῃ τι τὸ κινοῦν τὸ ὀρεκτικόν. εἰ γὰρ ὅλο, νοῦς καὶ ὄρεξις, ἐκίνουν, κατὰ νοῦν ἂν τι ἐκίνουν εἶδος. νῦν δὲ ὁ μὲν νοῦς οὐ κινεῖ κινοῦν ἄνευ ὀρέξεως· ἡ γὰρ βούλησις ὄρεξις. の如きは理性のこの附帶的能動性を自覺してゐる樣にみえる。

(二〇〇) 註一九〇參照

(二〇一) Met. θ, 2, 1046, b, 3: διὸ πᾶσαι αἱ τέχναι καὶ αἱ πολιτικαὶ ἐπιστῆμαι δυνάμεις εἰσίν. Eth. Nic. E, 1, 1129, a, 12. (註一八〇參照)

(二〇二) Met. Z, 8, 1033, b, 8; E, 1, 1025, b, 22; Eth. Nic. H, 13, 1153, a, 25; Pol. B, 8, 1268, b, 36; θ, 1, 1337, a, 19; Rhet. A, 2, 1358. a, 6; Top. I, 9, 170, a, 36.

(二〇三) Eth. Nic. Z, 4, 1140, a, 6-23: Mag. Mor. A, 35, 1197, a, 12.

ニコマコス倫理學の敍述によれば精神の現象形態はパトス、デュナミス、ヘクシスの三つに分たれる。パトスとは欲情、憤怒、恐怖、平靜、嫉視、歡喜、親愛、嫌惡、憧憬、憐憫、其他凡て快樂又は苦痛を伴ふものであり、デュナミスとはそれによつて我々が怒るとか恐怖するとか憐憫するとかの出來る所のものであり、ヘクシスとはそれに卽して我々が情意への關係に於てよく又はあしく振舞ふ所のものの謂であると言はれる。(二〇四) パトスはその例の示す如く略我々

の感情と呼ぶものに當る。それがデュナミスと異るのは後者が可能的であるのに對してそれ自ら現實的である事である。卽ちデュナミスはパトスの原因を爲すものである。各種のデュナミスが外界からの働を受けて實現した現象形態がパトスに他ならぬ。デュナミスは感覺主體に固有であるが、その實現たるパトスは外界との一時的交渉に依存するから、デュナミスに比して一時的皮相的である。(二〇五) 然しデュナミスとヘクシスは如何に區別されてゐるであらうか。我々が此文面から讀取る所では、デュナミスが沒價値的であるのに對して、ヘクシスが價値的であると云ふ一事である。デュナミスはパトスとの關係に於て規定されてゐるが、ヘクシスとデュナミスとの關係は不明である。若しデュナミスがヘクシスに依存するならば、ヘクシスがデュナミスに對して規定されずして直接パトスに對する關係に於て規定されてゐる事は解し難いことである。(二〇六) デュナミスがヘクシスと同樣パトスの原因であり乍らパトスを價値的に分つに到らず、而も他方ヘクシスはパトスに對して直接的に關係するとすれば、我々は寧ろ內容的により豐富なヘクシスを、より單純なデュナミスに基底附けられた高次の存在性であると解すべきであらう。ヘクシスが屢〻習得的能力を意味すると言ふ事實も之を證する。生得的能力は多かれ少なかれ類的普遍的な可能性であつて個性に乏しい。斯かる生得的能力に基く多樣な活動の累積によつて得られた習得的な能力としてのヘクシスは特殊的である。直接生得的な能力から發するパトスは自然的であり作爲を含まぬから價値的に無記であるが、習得的能力としてのヘクシスから發するパトスは其特殊性の爲に價値的了別をうけるのである。尤も具體的に考へれば單なるデュナミスからはパトスは生じない。我々のパトスはよかれあしかれ我々のヘクシスによつて特殊的限定を蒙る。怒と云ふ感情がその能力から發する限り價値的に無限定であると考へられるが、それは我々の怒の感情を單に普遍的な現象として抽象的にみる限りに於て言ひ得る事であり、具體的にみれば怒は何等かの種別を持つ。或は適度の怒であり、或は過少の怒であり、或は何等か適

不適の怒である。茲に區別されたデュナミスとヘクシスの區別は觀方の具體性と抽象性による程度上の相違である。(二〇七) 兎も角斯くの如くヘクシスから區別されたデュナミスは善惡の價値に關して無記的であり、ヘクシスは之に價値的了別を與へる。ヘクシスは善又は惡への一方性を持つのに對してデュナミスは斯かる一方性を持たず兩方向的中性的である。デュナミスなしにはヘクシスはないが、ヘクシスはデュナミスを更に特殊的に限定せるものであるとすれば、斯かるデュナミスは先に述べた蓋然的エンデコメノンに他ならない。さればこそ之から區別されてヘクシスがあげられてゐるのである。然るに定義に於て述べられたデュナミスそは正に茲に云ふヘクシスの性格を持つものである。倫理學の該所に於けるヘクシスは存在論的には定義に於けるデュナミスに當り、デュナミスは却てエンデコメノンに相當すると解すべきであらう。(二〇八)

(二〇四) Eth. Nic. B, 4, 1105, b, 19 : ἐπεὶ οὖν τὰ ἐν τῇ ψυχῇ γινόμενα τρία ἐστί, πάθη δυνάμεις ἕξεις, τούτων ἂν τι εἴη ἡ ἀρετή. λέγω δὲ πάθη μὲν ἐπιθυμίαν ὀργὴν φόβον θάρσος φθόνον χαρὰν φιλίαν μῖσος, ἵμερον ὀργὴ ἔλεον, ὅλως οἷς ἕπεται ἡδονὴ ἢ λύπη. δυνάμεις δὲ καθ' ἃς παθητικοὶ τούτων λεγόμεθα, οἷον καθ' ἃς συνκινοὶ γιγνόμεθα ἢ λυπηθῆναι ἢ ἐλεῆσαι. ἕξεις δὲ καθ' ἃς πρὸς τὰ πάθη ἐχόμεθα εὖ ἢ κακῶς, οἷον πρὸς τὸ ὀργισθῆναι, εἰ μὲν σφοδρῶς ἢ ἀνιέντως, καὶ τοῦ ἐχόμεθα, εἰ δὲ, μέσως, εὖ. κτλ : Eth Eud. B, 2, 1220, b, 15 ff. 但し Eth. Eud. や δύναμις に數くられる ὀργίλος, ἀνδρεῖος 等は惡德やありむしろ ἕξις である。Eth. Eud. や は兩者の別が明かになつてゐない。之は δύναμις 概念の發展の過渡期にあるものと解する。

(二〇五) Eth. Eud. B, 2, 1220, b, 15 : καὶ καὶ μὴν τοῦτο (d. i. πάθη) οὐκ ἔστι ποιότης, ἀλλὰ πάθος, καὶ δὲ τῶν δυνάμεις ποιότης.

(二〇六) Eth. Eud. B, 2, 1220, b, 18 : ἕξεις δὲ εἶναι ὅσαι αἰτιαί εἰσι τοῦ τοιοῦτο ἢ κακὰ λόγιον ὑπάρχειν ἢ ἀναγκαῖον, οἷον ἀνδρεία σωφροσύνη. Mag. Mor. A, 6, 1185, a, 16 : ἕξεις δὲ εἶναι καθ' ἃς πρὸς τοῦτο τοιοῦτο ὑπάρχει ἢ ἀναγκαῖον, οἷον πρὸς τὸ ὀργισθῆναι ἢ σωφρονεῖν. の τοῦτο を δύναμις の意味に解すれば ἕξις が δύναμις の基礎になる。(Solomon 譯は斯く解してゐる) 然しニコマコス倫理

學では ἐφ' ὅσον τὸ ἀνθρώπινον と明瞭に限定してゐる。それは ὀρθοπραγεῖν と云ふ例によつても明かである。

（二〇七）プラトーンでは德がデュナミスである。Laches 192, 6; Resp. 477 c-e.

（二〇八）拙著「アリストテレースの倫理學」六二註頁參照

以上によつて我々はアリストテレースの可能性の諸相を概觀した。之を要約すればデュナミスは本來實在的可能として、時間的に先行する原因に內在する運動變化の原理を現し、實在的な一方的傾向性を意味するが、その中でも能動的可能は特に種的限定として一方性が著しく、之が特に他の可能概念に對して其性格を顯はにする時はヘクシスと言ふ概念によつて現されるに到る。之に對して受動的可能性は類的であり比較的靜止的な兩方向性を有する。然しそれは具體的現實的存在を基體とする限りに於ては質料であつて、單なる觀念的可能とは區別され、或意味での實在的一方性を保有する。之に對してその基體が抽象的一般的概念となれば可能性は實在性を失つて觀念になる、之がエンデコメノンである。エンデコメノンの中でも基體の抽象性の少いものは蓋然的エンデコメノンであり、それは觀念的に一方の契機の優位を含む。そしてこの觀念的一方性は實在的可能の一方性の統計に基く。更に進で基體が全く捨象されるに到れば偶然的エンデコメノンと云ふ概念に到達する、之は全く兩方向的靜止的であつて、その極限には論理的可能を有する。デュナミスと言ふ概念は廣義に於ては之等の諸の可能概念の全領域に亙る。而してそれがヘクシスに對せしめられる時はエンデコメノンを現し、エンデコメノンに對せしめられる時はヘクシスを現す。之等の可能概念の諸相を區別する事はアリストテレースに於ける發展の思想と形相の思想の交錯を解くに當つての不可缺の條件であり、この認識を基礎としてのみ彼に於ける運動一般、隨て實踐活動や製作行動の構造を理解する事が出來る。又可能性のこの區別は意志や行爲の自由の問題を解く鍵として今日に於ても尙重大な價値を有するであらう。私は他日稿を改めて、この形而上學的基礎の上に立つて實踐の基本的構造の解釋を試みようと思ふ。

（完）